

# 日韓文学関連研究 ― 一九一〇年代の川路柳紅と朱耀翰<sup>チュヨハン</sup> ―

呉 英 元

## はじめに

世界文学を日本語から入って理解し、日本語で詩を書き、日本の詩壇で認められ一躍有名になった韓国近代詩人がいる。<sup>ソンア</sup> 頌児・朱耀翰である。朱耀翰は韓国最初の散文詩人であり、日本の詩を韓国語に訳し、韓国の文芸誌に掲載することによって日本を紹介し理解させた詩人でもある。

本論では朱耀翰という一人の留学生在が、小学校六年が終わろうとしていた頃の十二歳の時に来日して、一九一三年から一九一九年まで六年間の日本での生活を通して、一九一〇年代を中心に一詩人として世に光を浴びるようになった歴史的背景と共に詩文学の世界を研究し、詩を通して日本と韓国の文学世界を正しく理解するための翻訳された両国の詩を比較研究しながら朱耀翰の作品世界を再照明してみる。

# 一、朱耀翰と日本

朱耀翰（一九〇〇—一九七九）は一九〇〇年、陰暦一〇月一四日、平安南道平壤キリム里で、父朱孔三<sup>チュコンサム</sup>と母梁鎮心<sup>ヤンジンシム</sup>の間で八人兄弟の長男として生まれた。『朱耀翰文集』曙Ⅰ「私の履歴書」<sup>1</sup>によれば、「生まれる時から基督教徒になった私は小学校に入る前から教会と日曜学校に出て聖書の勉強をした。」ことから四歳になるころにはすでにハングルで書かれた聖書を全部読めたので、大人たちは「誰も教えた人がいないのに：神童だ」と言われた。

同じく「私の履歴書」のなかで、朱耀翰は幼い頃の自分を次のように語っている。神経質で比較的物欲がなく、外で遊ぶより、父の部屋の本棚にある『五倫行実図』という『三綱五倫』を図で説明した図本を見るのが好きだった性格で、一九〇六年、満五歳のとき、平壤の崇徳小学校に入り、四年生の時には学級新聞を創って級友に配ったといっている。朱耀翰は小さい時から優れた文筆の才能を持っていた。小説家の金東仁<sup>キムドンイン</sup>（一九〇〇—一九五二）はその時一クラス上の学級に通っていたという。

六年が終わろうとしていた頃の一九一二年、平壤で開かれた第一回イエス教長老会総会で朱孔三牧師が代表として選ばれ、東京朝鮮人教会の牧師として派遣されることになり、朱耀翰は卒業もせず自ら頼んで一二歳のとき父について渡日した。

父朱孔三は一八七五年三月二日農家で生まれた。「孔三」という名前は「朱子」と「孔子」の一字に「本人」を入れて三人という意味の「朱孔三」と、父が後で改名したものだ。「私の履歴書」のなかで朱耀翰は言っている。それは朱孔三の思想や意志をよく現わしているもので、朱耀翰に対する教育理念とも関連してくる。農業をやるには本人の才能が惜しいと思つた父孔三は平壤へ行って、アメリカの宣教師に出会い秘書兼朝鮮語の教師に採用されることになり、後に平壤神学校を卒業して牧師になる。この事が朱耀翰を来日に導き、日本を通じて世界を学ぶチャンスに恵まれることになるのだ。

『東京教会七二年史』<sup>2</sup>の記録によれば、朱孔三は、一九〇三年平壤章台峴教会で長老の按手を受け、全国の一五五名長老の

中から選抜されて一九〇三年平壤神学校に入学する。一九一〇年牧師の按手を受け、一九一二年第一代派遣牧師として選ばれ、一九〇八年設立された東京教会の第二代牧師として赴任する。同じく『東京教会七二年史』の記録によると、朝鮮イエス教総会は毎年九月の初めに開かれており、東京教会の創立は五月となっていることから赴任した時期は、朱耀翰の六年が終わろうとしていた頃ということに合わせて考えれば年度が代わる頃ではないかと推測される。朱孔三の赴任してから最初の九月、ソウルで開かれた第二回総会での報告によれば、当時、東京には朝鮮人留学生が約五、六百名いて、そのうち教会に通っていた学生は九〇名から一〇〇名いたという。同じ記録によると、東京教会は朱孔三牧師の努力によって発展する成長時代に變化され、一年間の信徒数は一六〇名から二〇八名になったと記されていることから父朱孔三の人格や息子に対する家庭教育の一面が推察される。

東京の朝鮮公使館は留学生の監督府になっていて、その中に日本語の講習所があった。そこで朱耀翰は一年間日本語を学んだ後、一九一三年四月、明治学院中等部一年級に無試験で入学し、一九一八年三月、席次四番で卒業する。当時の朱耀翰の住所は、「神田区西小川町貳丁目七番地」になっていて、今の千代田区猿樂町辺りである。東京教会は新宿区若宮町にあつて、在日本韓国基督教青年会、即ち、一九一九年二・八宣言の場所のYMCAは、千代田区猿樂町二丁目にあることから朱耀翰の生活周辺は環境のよいところであつたといえる。一九一〇年前後あたりの朝鮮人留学生は慶応、早稲田にも多く入学したが、『東京教会七二年史』のなかに、留学生のうち教会に通っている学生はほとんどミッション・スクールの明治学院に入学していたと記してある。「私の履歴書」によれば、金東仁も来日して一緒に明治学院に入学した。お金持ちの息子である金東仁は、当時出版されたばかりの世界文学全集を始め、多くの文学書を買つては二人で耽読した。要するに朱耀翰は世界の文学を日本語から理解することになる。特に詩を愛し、最初に手にしたのはバイロンの詩集であつた。また、永井荷風や上田敏、与謝野鉄幹の訳詩を通して世界のシンボリズム詩人に心酔していった。

朱孔三牧師の三年間の東京任期が終わつて帰国する一九一五年、二年生だつた朱耀翰に寮生活が始まる。「東京と上海<sup>③</sup>」の

なかで、「韓国人学生は七、八名いたが、アメリカ人宣教師が設立したミッション・スクールで西欧人教師も多く自由主義的校風だったので朝鮮人として特別に悲しい思いはしなかった」という明治学院の環境や寄宿生活が彼にとつて、「私は中学校の四年間を始め、一校と上海の滬江大学を通して約一〇年間の寄宿生活をしたが学生時代の寄宿舎生活は教育的効果が大きいと思う。生活習慣にも影響を与える。」と、八〇歳近い老齡においても自分の身の回りは端正に整理する習慣を寄宿舎から影響された人格形成であると回顧している。

このように自ら父に頼んで日本に連れて来られた若き朱耀翰は、意欲的に日本の良さを学び身につけていく。

## 二、朱耀翰の明治学院時代

明治学院は早くから朝鮮人留学生の多い学校であつた。韓国近代文学史上最も有名で世界的にもその名が広く知られている春園・李光洙チユンウォン イクワンズ（一八九二—？）も朱耀翰の入学する前、一九〇七年九月十日、中学三年に編入し、一九一〇年三月に普通部五年を卒業している。

朱耀翰は明治学院時代にも成績優秀な学生で、『白金学報』の編集委員となつて、文学会、弁論会などでの受賞作や、書簡文、紀行文などの作文が多数掲載されており、少年期から文才を発揮していた。一九一三年一二月発行の明治学院『白金学報』第三一号に掲載された「霜の朝」の作文を初め、第三七号の紀行文「日光へ」と第四三号の「芸術の使命」と題した弁論大会の演説文や第四四号の書簡文「あれから」が発表された。

霜の朝

第一年級甲組 朱耀翰

朝早く起でて、戸を排して見れば、満庭の霜白妙に、さながら雪の如し、朝の空氣新鮮にして、涼風顔に中る、前面の小陵、靄、防ぎて見る能はず、早曉のさびしさに門を出でて見れば裏の通、夜明つつあり、空に孤雁の啼声、聞ゆ、東の空に紅色の雲を溶かしてゐる、小川の橋上、行人稀に江水ひとり潺々として流る、耳を傾くれば颯然として水上に聲あるが如し、暫く散歩して、靄を突破し、霜を踏みつつ家に帰れば時既に六時を過ぎたりき。

〔霜の朝〕 朱耀翰 『白金學報』第三二号 一七頁 一九一三年二月一八日

これは、「霜の朝」という題目で『白金學報』第三二号に載せられた朱耀翰一年のときの日本語による創作作品で最初に活字化されたものである。同じ題目で第一年級甲組の玉井貞廉の文章と一緒に載せられているのを見ると、一年級に出された作文宿題の文章と見られる。

二人の作品を比べてみると玉井貞廉の文章は写實的散文体になっているが、朱耀翰の文章は韓国の田園風景が漂う叙情的詩的文体である。一三歳にしては成熟された感性と一、二年間の日本語習得での表現力には驚く。三年生の時の一九一五年第三七号に日光への修学旅行から書かれた文章の「日光へ」や、五年の時の一九一八年第四四号の『白金學報』に発表した最後の文章で、明治学院時代の生活を顧みて書いた「あれから」などでも朱耀翰の詩人としての優れた才能がうかがわれる。

朱耀翰は学習においても全科目九〇点を上回るほど成績優秀であった。一九一四年第三三号に一年級の優等賞二等賞受賞者として、一九一五年第三六号には二年級の二等賞優等賞を續いて受賞しており、一九一七年第四三号に「藝術の使命」と題した弁論大会における二等賞受賞や、各号に載せた寄宿舎便りなどを通して優秀な学生として活躍したことが分かる。「私の履歷書」で朱耀翰がいつているように、「図画（美術）・習字（書道）」を除いてはすべての科目をみなよくやったがその中でも算数を特別によくやった。<sup>4</sup> 朱耀翰にとって明治学院での一九一三年から一九一八年三月卒業するまでの五年間は、『白金學報』に朱耀翰の名前が出てこない時がないほど脚光を浴びていた生き甲斐のある時代であったと言える。

### 三、詩人川路柳虹との出会いと朱耀翰の詩作活動

朱耀翰は、中学時代『白金学報』の編集に携わる一方、『文芸雑誌』に詩や短歌を投稿して佳作に選ばれる。その頃、島崎藤村、土井晩翠、北原白秋らの詩集を読み、上田敏、永井荷風らの訳詩集を通してヨーロッパの詩に接する機会をもって、自らも詩作への興味を覚え、雑誌への投稿をはじめた。

生方敏郎が編集していた『文芸雑誌』は中央文壇と地方文壇の文藝愛好家を結び付ける雑誌として発行され、毎号にわたって懸賞募集があり、読者の投稿も多かったが、一九一六年四月に創刊され、一九一七年四月には廃刊された。一九一六年一〇月、投稿した朱耀翰の詩「五月雨の朝」が詩の選者であった三木露風に認められ、佳作として選ばれて一九一六年一月一日発行の『文芸雑誌』第一巻第四号に掲載された。つづいて同年十一月号に「狂人」が同じく佳作となった。「五月雨の朝」は、日本の文芸誌に活字化された最初の作品である。

#### 五月雨の朝

朱 耀 翰

五月雨の朝

風は雨を吹きて

墓場の木々は

おもしろげに踊る。

雨のしづくははたくと

しげれる葉に音して落ち、  
濃き緑り、

ちら／＼ひるがへつて  
白く光る。

再び空はしづまりて  
しづかに立ちのぼる  
しろき烟り。

すべてやすらかに  
息つくさやかさ、  
ゆたかに生の気の  
たゞよふ。

されど

いかにせむ

沈みゆく我が霊。

春をたごりて

涙は流る。

〔五月雨の朝〕 朱耀翰 『文芸雑誌』 第一卷第四号 九三頁 一九一六年一〇月一日

その評に「純な態度がある。それを何より善く感ずる。」と記している。続いて「狂人」が佳作として同じく第五号に掲載され、「蜘蛛の網の中に神の聲を聴く、此くの如き狂人は詩人の謂れである。」と評価している。

朱耀翰はこの詩の選者であつた三木露風に認められることを機に、当時、口語自由詩の創始者として活躍していた川路柳虹が出す詩集『伴奏』に朱耀翰の詩「お春」が推薦発表された。

朱耀翰は三年のときから詩人川路柳虹の家に出入りしていた。「東京と上海」のなかで、「三年生の時から詩人川路柳虹氏の家に入りました。日本語で詩を書いて行くと手を入れてくれた。『同人詩誌』『曙』というのを出していて学生も指導してくれるというので訪ねてみたのだが日本人学生も五・六人出入りしていた」と記してある<sup>⑤</sup>。

朱耀翰にとって川路柳虹との出会いは詩との出会いであつた。川路柳虹（一八八八―一九五九）は日本最初の口語自由詩人である。東京生まれ、京都美術工芸学校を経て東京美術学校日本画科を卒業する。京都在学中から詩作を始め、一九〇七年九月号『詩人』誌上に口語自由詩「塵溜<sup>はきだめ</sup>」（のちに「塵塚」と改題）を発表して全詩壇に衝撃を与えた。川路柳虹は新しい詩歌の研究と創作を目的とする活動を続け、一九一四年には第二詩集『かなたの空』を出し、三木露風編集の『未来』の同人となった。一九一六年一月には独自に詩歌の愛好家や詩人を育成する目的で曙光詩社を創立し、『伴奏』を創刊した。曙光詩社からは詩誌『伴奏』『現代詩歌』『炬火』『詩作』などが相次いで発行された。

朱耀翰の詩「お春」は、一九一七年、川路柳虹編集の詩集『伴奏』第二輯に載っている。



お 春

朱 耀 翰

雪の国に住む娘なりき。

落葉松からまつの深林にひそまり照らす

黄ばむ冬日に、淡き雪はつもり――

機織はたる娘は歌ふなり、涙の歌。

金きんの十字の菜の花の亂れ咲く頃、

さみだれは夢のしらべにおとなふ日――

彼女は高原の家に生れ出でぬ。

「お春よ」と父は朝な夕なな汝が名を呼ぶ。

さはあれ春はゆきへかり、いつか五たび

幻しの運命ぞ母を奪ひし、

影さむしき秋の日のにほひに

はた織る娘は歌ふなり、涙の歌。

たゞひとりの父こそ汝が友なれ

高原の巖にふたり起き伏し――

娘の手握りしめ――娘ゆゑ

「お春よ」と父は朝な夕な汝が名を呼ぶ。

山の斜面は夕べ近く

牝鹿の歌はもつれゆく。

あゝお春も女にてありし、その血潮――

燃えつゝ、轟きつゝ流れゆく。

求むる心の燃えゆれども

めじかの鳴く音は止む日なく、

父をし思へば胸しづめて

機をる娘は歌ふなり、涙の歌。

（「お春」 朱耀翰 曙光詩社詩集『伴奏』第二輯（新春の巻） 八三頁

川路柳虹編 一九一七年一月 曙光詩社発行）

曙光詩社には『伴奏』が創刊されてから普通社友と特別社友があつて、朱耀翰は一月社費五〇銭を払つて曙光詩社の「特別社友」になった。それかれの朱耀翰の詩作活動は活発になつていく。曙光詩社詩集『伴奏』には朱耀翰の詩が七篇発表されてゐる。第二集に「お春」、第三集に「冬」「欲求」、第四集に「葡萄の花」「眠れる嬰兒」「ふるさと」「失なはれし者」である。

「お春」は、川路柳虹に詩才を認められた最初の作で、川路は朱耀翰の詩を独特の味があると認め、詩才が将来大きく実を結ぶことを期待していた。朱耀翰は一九一七年『日本現代詩選』に「地の愛」に続き、一九一八年二月『現代詩歌』第一巻第一号に「晝と夜の祈禱（2）」を始め、第二号から第八号まで次々と発表し、一九一八年一〇月、『現代詩歌』第一巻第九号には「微光」と「あけぼの」の二作を川路柳虹から推薦を受ける。

推薦された後も第一〇号、第二十一号と続いて発表し、第二巻の第一号には「朝鮮歌曲鈔」という題で韓国の「時調<sup>シヨ</sup>」を七首日本語訳にして紹介している。

「時調」を紹介するにあたって朱耀翰は、その前書きに次のように述べている。

「今度は少しばかり朝鮮の民謡を紹介しようと思つた所が今手元に材料がないので、古来から多く智識階級に行われた「時調」なるものを二三譯して見た。これはやゝ一定した形式をもつた（勿論時代によつて少しばかり違ふが）恰も日本の和歌に似たものであると思へばいゝ。いつ頃初まつたものかは分らない。三国時代（即、日本で云ふ三韓時代）及新羅統一時代には相當の發達を遂げたらしいが今日に残つてゐるのは極わづかである。その上に儒学が行はれ出してから純粹な朝鮮語で歌つたものは多く散逸してたゞ漢文的色彩を帯びたもののみが傳はつて居るのは遺憾である。勿論これらは皆吟詠せらるべきものであつて今日に於ても技生<sup>マ</sup>達によつて歌はれる。「歌曲」の名はそこから起つたのである。なほ今日の表<sup>マ</sup>準格調は三四三四、三四三四、三五四三の三行をもつて成る。もとより調子本位だから音数の制限はさほど嚴密でない。たゞ如何なる程度に於て變格を許すかは朗詠上のデリケートな問題であるらしい。

今その中の戀愛をとり扱つたものゝ一二を紹介しよう。原作者の名前はあげる必要もないし又うるさいからあげない。」

（「朝鮮歌曲鈔」朱耀翰 『現代詩歌』第二巻第一号 一九一八年一〇月）

この文章の内容から、新しい近代詩を受け入れようとした先駆的立場にいた朱耀翰が、西欧的近代詩志向の文藝誌に、韓国の民謡または伝統的な「時調」があるということを日本に紹介しようとした朱耀翰の思いを察することができる。

『現代詩歌』に紹介された「時調」の中から一篇だけを選んでここに載せてみる。

かうとて如何があらん、さりとて如何があらん

萬壽の山の山かづら、縫れたとて如何があらん

われらもかく縫れ合つて百年をも永らへむ。

（朱耀翰訳 『現代詩歌』第二巻第一号 一九一八年一〇月）

이런들 어떠하며 저런들 어떠하리

萬壽山 드렁칠이 엮어진들 어떠하리

우리도 이같이엮어져 백년까지 누리리라

現代語訳 筆者

（『韓国時調大事典上』 朴乙洙編著 亜細亜文化社 一九九二年一月五日）

この「時調」は、後に朝鮮王朝第三代王の太宗テジョンとなる李芳遠イバンウオン（一二三六七―一四二二）の「何如歌ハヨカ」とよばれる歌で、高麗王朝の遺臣・鄭夢周チョンモンジュ（一二三三七―一三九二）の意中をさぐろうと歌ったものである。その贈答歌として歌われた鄭夢周の「丹心歌タンシンムカ」と共に高麗末期の代表的な作品といえる。ここに鄭夢周の高麗王朝に対する変らぬ忠心を歌い返した「丹心歌」を紹介する。

この身死にはて 百たび死に絶えて

白骨土となり たとい魂あるもなくも

君への赤き心こそは変らざらんものを

（『朝鮮文学史』金思燁・趙演鉉 著 北望社（一九六五）

이몸이 죽어죽어 일백번 고쳐죽어

백골이 진토되어 넋이라도 있고없고

님향한 일편단심이야 가실줄이 있으라

現代語訳 筆者

（『韓国時調大事典 上』 朴乙洙編著 亜細亜文化社 一九九二年一月五日）

『現代詩歌』第二巻の第一号に「朝鮮歌曲鈔」という題で紹介して載せた朱耀翰訳の時調「何如歌」を他の訳者の違う表現での訳も一緒に挙げてみよう。

世の中は とてもかくてもあるものぞ

万寿山の蔦葛 つたかつら 絡み合えるも世のすがた

われらも かくは手を取りて 長き月日を楽しまん

（『時調』（朝鮮の詩心）尹学準 著 創樹社（一九七八）

斯くせんもよし しかせんもよし

万寿山の葛のつる 絡むとてまたよし

われらもかく絡み合いて とわにかくせむ

(『朝鮮文学史』金思燁・趙演鉉 著 北望社(一九六五))

日本での朱耀翰の文芸活動は、一九一九年二月発行の『現代詩歌』第二巻第二号の詩「霧と太陽」を最後に、第四号と第五号に詩評が載っているだけで、一九一九年三・一朝鮮独立運動勃発のため上海に亡命することにより日本での詩作掲載は終わるのである。

一九一六年から一九一九年までの三年間、朱耀翰の日本における文芸誌上での詩作活動は実に眩しいほど輝くものであった。『文芸雑誌』に投稿した「五月雨の朝」が佳作に選ばれたのを始めとして二篇、『伴奏』に推薦発表された「お春」を始め七篇、『日本現代詩選』に一篇、『現代詩歌』に発表された詩二〇篇を合わせて総三〇篇に及ぶ。ここに日本文藝誌を通して発表された作品をまとめてみると次の通りである。

『文藝雑誌』	第一巻第四号	「五月雨の朝」	(一九一六年一〇月)
	第一巻第五号	「狂人」	(一九一六年十一月)
『伴奏』	第二輯	「お春」	(一九一七年一月)
	第三輯	「冬」	(一九一七年四月)
	同	「欲求」	(同)
	第四輯	「葡萄の花」	(一九一七年七月)
	同	「眠れる嬰子」	(同)

	同	「ふるさと」	(同)
	同	「失なはれし者」	(同)
	『日本現代詩選』	「地の愛」	(一九一七年十一月)
	『現代詩歌』 第一卷第一号	「晝と夜の祈禱(2)」	(一九一八年二月)
	第二号	「春立つ日の歌」	(一九一八年三月)
	第三号	「あくる朝」	(一九一八年四月)
	同	「朝」	(同)
	第四号	「夜、寝る時」	(一九一八年五月)
	同	「晝と夜の祈禱(4)」	(同)
	第五号	「夕暮の誘惑」	(一九一八年六月)
	同	「卓上の静物」	(同)
	同	「女」	(同)
	第六号	「まどろむ女」	(一九一八年七月)
	第七号	「嵐」	(一九一八年八月)
	同	「自画像」	(同)
	同	「星」	(同)
	第八号	「七月の夜」	(一九一八年九月)
	第九号	「微光」	(一九一八年一〇月)
	同	「あけぼの」	(同)

第十号 「暗黙」

(一九一八年二月)

第十一号 「食卓」

(一九一八年二月)

第二卷第二号 「霧と太陽」

(一九一九年二月)

この作品のなかで、三木露風に佳作として選ばれた詩が「五月雨の朝」と「狂人」で、川路柳虹に推薦された詩は「お春」、「微光」、「あけぼの」の三作である。

一九一八年一〇月発行の『現代詩歌』第一巻第九号の「推薦」の言葉に、川路柳虹は、「松本、山崎、朱、三君の詩について」と題した作品紹介のなかで、「わが社の新進詩人」「三君の詩をこゝに推薦して詩壇の方々の注意を呼び起こしたいと思ひます。」といつて、「朱耀翰君に至つてはわが隣邦朝鮮国の最も新しいヤングジェネレーションを代表する詩人の一人だと云つてもいゝと思ひます。母国語以上に流達なこれらの詩句の馳駆だけを考へても確かに興味ある事です。のみならずその熱意と敏感と豊醇な情操も誠に得がたいものと思ひます。」と評価している。また、『現代詩歌』第一巻第十号に平戸生の「推薦の詩に就いて」と題して三君の詩の批評が載っている。「朱君の詩」については、「朱君は此散文的な世界で、何處かの一遇に匂つてゐるバイオレットを想像する。バイオレットは仲々しほれたのではない。いつも生々としてゐる。「微光」は氣持のよい詩だ。君について私の感ずるのは、私の尊敬するのは、可成その内省力に堪へる點だ。」(以下略)と批評している。

微光

朱耀翰

あゝ誰が知らう？聖らかに光を湛へたこの夜―ほんのりと空に浮ぶ憧憬の海に、音なく走る幻の船を、又其處にて我が心無言にその權を操れるを、わが胸はいとも静やかに靡き、そこはかと蹲る黒い夜を揺りいこすを、わが幼い兩手



のすばいこく、動くに連れてゆるやかに遠のく天鷲絨の波紋を。又我が頭上にて愛らしい小唄を歌つて聞かす私の星を。

我が船は行く、人知れぬ境にわが狂喜の地を求めて。聞けよ、霧深き彼方の岸にかそけく、木霊するわが臆病勝ちな祈りを。きけよ、強き楽の音を、ときたま起るすゝり泣きを、又、水底より匂ひ送る、若くして快よい情慾の匂ひと、不思議な針眞實の上に花咲くわが感覚とを。

あゝ今匂ひ深い沈黙の影に混じつて、何處からか恐怖と悵鬱の聲音が忍び寄つて来る……。併し私の身體は星で一杯――私はたゞ私の輝かしい青い太陽を自分の目の中に見付けませう、あゝ私の船が軋む、喜ばしげに。今、差し昇る大地の微光に照らされた静謐の時は、夜を込めて降り積むほの暗い睡蓮の花弁の重みに壓されてか、十月の雨の如く幽かに慄きながら音もなく我が心に溢れそゞぐ、……。おゝ尊い無言よ！……。リリ、リリ、何處からとなく蟲の鳴く音がする、あゝ私の船が軋む……。心の奥で、喜ばしげに、喜ばしげに軋む……。

〔微光〕 『現代詩歌』第一卷第九号一九一八年一〇月

この詩「微光」は、全三連の散文詩になっている。朱耀翰の詩の世界は、一連の若き青年の心に響く夢や、二連の滲み出る切なる祈りや、三連の将来にかける期待と抱負に満ちる夢が実に愉快で、全体的に成熟された神秘的な世界へと導く強い力を感じさせる。

その後、朱耀翰は、続いて第一高等学校に進む。当時の状況を『朱耀翰文集』「東京と上海」の回顧文のなかで、「一九一八年三月、中学校を出た後何か月間は『創造』創刊作業と共に高等学校受験準備もしなければならなかった。当時、高等学校は九月入学で入学試験は七月だった。(略) 一校を希望した明治学院出身は再受験生を合わせて約八〇名だった。(略) 明

治学院では私一人しか合格できなかった。(略)『朝日新聞』記者が宿舍に訪ねてきて私の記事が載った。朝鮮人として一校に合格したのが始めてあったからである。(略)みんなが羨ましがこの一校の生活も一九一九年二・八宣言と三・一運動によつて半年も続けなかった。」とある。

「東京と上海」のなかで、朱耀翰は、「日本語を通して世界の文学作品を読み、また日本語で書いた詩が『曙』や『秀才文壇』に発表されたが、五年の時から懷疑を感じ始め、韓国語で詩を書き始めた」という。「불놀이・火祭り」が韓国の最初の文芸誌『創造』創刊号に載せられたので、韓国最初の現代散文詩だといっているが、『創造』が創刊する前に発表された詩が、一九一八年の五年生のとき、主に京都の留学生たちが出した『学友』誌に発表されたもので、「幼い妹達へ」とサブタイトルを付けた散文詩「나애기・はなし」、「샘물이 혼자서・泉の水が一人で」、「봄의 꿈은 빠르다・春の夢は早い」、「할미꽃・翁草」、「시내・小川」、「복사꽃이 피면・桃の花咲くと」などであるといっている。

朱耀翰は、自由詩人川路柳虹に会い、詩を書きながら文学を通して国を愛することについて考えた。そして、日本語での詩作から懷疑を感じ、韓国語で詩を書き始めた。朱耀翰が来日した一九一二年は、一九一〇年日韓併合条約が締結されてからの二年後のことで、日韓併合による厳しい社会情勢の下であつた。『東京教会七二年史』のなかに、「一九一五年以後日本高等警察の内査が甚だしく、優秀な青年たちは要注意人物として等級を甲号、乙号、丙号に分けて監視をしたのだが、要注意人物五〇名の中に白南薫、尹昌錫、崔八鏞、田榮澤、朱耀翰、白南奎等半数以上が基督教人であつた」とある。当時の若い留学生たちは、国を守るための勉強や留学活動を広げていった。朱耀翰は、当時日本留学中であつた金東仁・田榮澤チヨンヨンテクと共に一九一九年二月一日、韓国最初の純文藝同人誌『創造』を創刊した。

『創造』が出るまでの経緯を朱耀翰は「東京と上海」のなかに詳しく書いている。その内容を簡単にまとめると次の通りである。

「金東仁と純文藝誌創刊を計画し、金東仁が帰国して二百ウオンかを工面してきて、校誌編集経験のある私が原稿集めから校正・編集・整版まで担当し、ハングルの活字がなくて、横浜の福音印刷所でハングルの聖書と讃美歌を発行していることを知ってそこで印刷した。ハングル文字の知らない日本人作業人が苦勞した。一九一八年三月頃から準備をして、原稿から資金までほとんど金東仁と二人で受持ち、約一年間の辛い産苦の経験を経て、一九一九年の二・八宣言直前に二千部を発行し、配布・販売は主にソウルで行われた。」

（『創造』が出るまでの経緯、「東京と上海」二一頁―二二頁より）

このようにして創刊された韓国最初の純文藝誌『創造』は、留学生たちの熱い愛国心の現れてあつた。『創造』創刊号の最後の頁に「余り言葉」として冒頭に「我らの奥底から湧き起こる、押さえ切れない要求によつて、この雑誌が生まれました。（略）我等の行く道が正しい間は、我等はどんな暗礁も恐れません。（略）私たちの道を止める人は誰ですか！」それから続いて、「心の淋しい人は来てください。私たちは彼と共に泣いてあげます。胸の痛む人は来てください。私たちは彼と一緒に心痛み、共に悩みます。嬉しい人は来てください。私たちは彼と一緒に踊り歌おうと思います。」と、民族と運命を共にして同苦同樂しようとする強い意志が現れている。それによつて『創造』はこの世に出た。

一九一九年二月一日発行の『創造』創刊号には、朱耀翰の詩四篇と戯曲と小説に続いて「日本近代詩抄（一）」として六人の詩人と九篇の詩が紹介され、同じく同年三月二十日発行の『創造』第二号には、朱耀翰の詩二篇と小説、評論、紀行文に「日本近代詩抄（二）」の日本近代詩人四人と一六篇の詩が紹介されている。第一年第一号の『創造』創刊号は、全八二頁で、第二号の第一年第二号は全六〇頁に編集され、両方とも「定価参拾銭」となっている。

詳しくは次に記す通りである。

創刊号 (内容)

「火祭り」(詩)	.....	耀翰 (1)
「黄昏」(戯曲)	.....	極熊 (4)
「神秘の幕」(小説)	.....	白岳 (20)
「惠善の死」(小説)	.....	長春 (36)
「弱き者の悲しみ」(小説)	.....	東仁 (53)
「日本近代詩抄 (1)」(翻訳)	.....	野花 (76)

第二号 (内容)

「弱き者の悲しみ」(小説)	.....	東仁 (1)
「天痴?天才?」(小説)	.....	長春 (22)
「太陽の季節」(詩)	.....	耀翰 (31)
「ルネサンス」(評論)	.....	極熊 (33)
「詩人ゲーテ」(評論)	.....	秋湖 (37)
「日本近代詩抄 (2)」(翻訳)	.....	野花 (43)
「故郷の道」(紀行)	.....	白岳 (51)

# 造 創

號 月 三

---

號 二 第

■ 内 容 ■

약한자의 슬픔 (小説)..... 東仁 (1)

天痴?天才? (小説)..... 長春 (22)

해의 시절 (詩)..... 耀翰 (31)

르네상스 (評論)..... 極熊 (33)

시인 게테 (評論)..... 秋湖 (37)

日本近代詩抄 (2) (翻訳)..... 野花 (43)

故郷의 길 (紀行)..... 白岳 (51)

□ 刊 行 □

社 造 創・東京・九一九一

# 造 創

號 月 二

---

刊 創

■ 内 容 ■

황혼 (戯曲)..... 極熊 (4)

神秘의 幕 (小説)..... 白岳 (20)

惠善의 死 (小説)..... 長春 (36)

약한자의 슬픔 (小説)..... 東仁 (53)

日本近代詩抄 (1) (翻訳)..... 野花 (76)

□ 刊 行 □

東京・九一九一

執筆者は、五人で各分野を担っており、朱耀翰、金東仁以外は芸名を使っている。北極の熊を象徴する「極熊」はYMC A総務を勤めていた「崔承萬」で、「白岳」は「金煥」、「長春」・「秋湖」は「田長春」、「東仁」は小説家「金東仁」、「野花」は「朱耀翰」である。朱耀翰は創刊号に「火祭り」「暁の夢」「白い霧」「贈り物」の詩四篇と第二号に「太陽の季節」「朝の少女」の詩二篇を発表している。

一九一九年の三・一運動が起こる直前と直後の二回に渡る『創造』の出版は、留学生にとって最も苦しい悪条件の下でのことであつた。『創造』第二号の編集は悲壮な覚悟でやった」と、朱耀翰の「東京と上海」に回顧している通り、小人数の熱い思いが産苦を経て実つた『創造』の少ない紙面に「日本近代詩抄」が韓国語に訳され、初めて海外に紹介されたという出来事は日韓の両国において決して軽く見過ごすことではない。このようにして生まれた韓国最初の純文藝誌『創造』は、一九一九年二月一日発行の創刊号と同年三月二十日発行の第二号をもつて一旦中止せざるを得なかつた。朱耀翰の第一高校時代の記録には、一九一九年一〇月二五日授業料未納による除名となつてゐるが、『朱耀翰文集』の「年譜」<sup>(10)</sup>によれば、「三月に国内で三・一運動が起こると第一高等学校を出てソウルに寄つて平壤に到着。父の忠告に従つて三月に再び東京へ戻る。上海に臨時政府が樹立されたことを知り、五月中旬船便で上海へ脱出する。」となつてゐる。後に上海の滬江大学を出て帰国し創作活動を続ける。『創造』は第九号まで続刊された。

#### 四、文芸誌『創造』と日本近代詩抄

朱耀翰は、一九一六年から一九一九年までの間、『白金学報』、『文芸雑誌』、『伴奏』、『現代詩歌』などを通してそれぞれ「霜の朝」、「五月雨の朝」、「お春」、「微光」の代表作を始めとして四〇余篇を発表した。また、一九一九年二月には、東京で留学中の金東仁・田榮澤と共に創刊した韓国最初の純文藝同人誌『創造』の創刊号と第二号に「日本近代詩抄」を連載して、

島崎藤村、北原白秋等一〇人の日本詩人と二五篇の代表作を韓国語に訳して紹介した。

民族の苦しみを共にし、筆を持って喜怒哀楽を分かち合おうとする『創造』に、朱耀翰はなぜ、韓国に日本の詩を紹介しようとしたのか、そして、なぜこの詩人のこの詩を選んだのかという疑問を抱かざるを得ない。その答えとして次の序説文に朱耀翰は、紹介する詩や詩人に対しての動機や意味づけを詳しく述べている。

# 日本近代詩抄 (1) (創刊号)

## ◆ 序 説

最近五十年の間、西欧文明の影響を受けて起こった、新しい日本の文藝を注目しようとする時、先は新體詩、後には長詩と呼ばれる形式で成立した近代詩を忘れることはできない。

長い伝統を持った『和歌』を除いて、西洋詩と似ている新様式を立てようとする意味で成立した、この新體詩の始まりは明治十五年四月外山、山、井上巽軒等が著作した『新體詩抄』という詩歌集からである。その格調に対しては在来の日本語の基調である七五、五七調にならざるをえなかった。その後、連続していろいろな雑誌が出はじめてからここに新詩の揺籃時代を作った。その中でも雑誌「文學界」と「国民の友」等に載った何人かの詩人を上げる事が出来る。連続して明治三十年に「文學界」の同人であつた島崎藤村氏の「若菜集」の出現により、詩壇は揺籃時代から脱皮して、少なくとも一つの完成に至つたといえる。

見方によつては異なる区分ができるがここでは大体明治及び大正の詩壇を分けると前半はロマンチズム(浪漫主義)時代であり、後半はシンボリズム(象徴主義)時代だといえる。最近に至つては更に複雑な要素が加わつて、再び新しい傾向を見出そうとするが未だにその渦中にあるので明確に判断しきれないのは決まつた理致である。

ここで、この三段階に分けて各作家を中心に簡単に紹介しようとするのは、現在朝鮮においても新しい詩が起きようとする時、決して無意味なことではないと思う。

#### ◆ ロマンチズム時代

日本民謡の完成者といわれる島崎藤村氏が詩壇に登場する前後して——詩壇の揺籃時代と稱する時代を合わせて——いろいろな作家が登壇した中で、先は与謝野鉄幹、河井醉茗、後には土井晩翠、平木白星、横瀬夜雨諸氏の詩は、その名聲上での価値においても、皆、相當な地位を得られたといえる。

勿論この諸氏たちの前にも中西梅花、北村透谷、国木田徳歩（この人は後に小説文壇の自然主義の先駆になった）、その他松岡國男等がいたが彼等の作品は殆ど藤村氏の藝術の中に含まれたといっても差し支えない。このようにして藤村氏によつて詩體を成した新體詩は鉄幹醉茗、晩翠等諸氏を経て、薄田泣菫氏に至つて完全に發達した。氏の詩集「ゆく春」を稱讃して「垂細垂初めて詩を聞いた」といった鉄幹氏の言葉を見ても明らかである。従つて、日本詩壇のロマンチズム時代を見ようとするならば初期には藤村氏、後期には泣菫氏の作品を見れば分かる。彼らと同時に登場した、蒲原有明、岩野泡鳴氏も初めは浪漫主義で始まったが、後には他の要素を加えてシンボリズムに變つたので次の時代に入れるのが正しいと思う。

『創造』創刊号 「日本近代詩抄（一）」 序説 七六頁

筆者訳 原文に充実しようと努めた

朱耀翰は日本近代詩を韓国に紹介する時、まず、日本の西欧文明の影響を受けて起こった新しい文芸の變化を注視し、日本近代詩壇の成立とその流れをロマンチズム（浪漫主義）時代とシンボリズム（象徴主義）時代に大別した。そして、伝統的詩體を脱皮し、新體詩から近代詩へと變化した日本近代詩の流れを大きく、新體詩とその後の近代詩に分けて説明して

いる。また近代詩の始まりは「文学界」の同人であった島崎藤村の『若菜集』の出版から出発したと述べ、島崎藤村を高く評価している。当時朝鮮においても新しい詩が起きようとしている時、若い日本留学生の手で創刊された『創造』を通して、日本近代詩壇の作家を中心に詩を紹介することは、新しい文学を目指す青年たちには説得力のある強い刺激になるに違いない。そして、島崎藤村の深い詩的発想や鋭い浪漫的感性は、口語自由詩の抒情性を目指す朱耀翰にとって多大な影響を与えたに違いないし、韓国の若い詩人にも愛されたであろう。

詩人を紹介するに当たって、日本民謡の完成者といわれる島崎藤村を始め、与謝野鉄幹、河井醉茗、土井晩翠、平木白星、横瀬夜雨諸氏の詩を日本近代詩の代表としてあげた。しかし、創刊号に実際載せた詩人は、藤村氏によって詩体を成した新体詩は薄田泣菫に至って完成されたとして、日本詩壇のロマンチズム時代を初期は藤村氏、後期は泣菫氏の作品を評価し、与謝野鉄幹ではなく薄田泣菫を加えた六人を紹介している。

『創造』第二号に続く「日本近代詩抄(2)」の序文には、ロマンチズム時代からシンボリズム時代へと日本近代詩壇の流れと詩人について述べている。

私は先に、蒲原、明氏と岩野泡鳴氏を一つのシンボリズム代表として挙げたが、勿論彼らの本質的表現は(時代の関係もあつたけれど)単純なロマンチズムであつた。ただ後年になって、ある程度まで、シンボリズムに通じる態度を見せたに過ぎないので、ここに紹介するのは大体浪漫的詩句を表したのが多い。

そうしている内、明治三十八年以来、この新詩壇の革命時代が訪れた。上田敏氏の仏蘭西象徵詩の紹介(翻訳詩集『海潮音』)に始まり、詩(特に象徵詩)に関する論説が多いし、詩集の出版もその数だけ見ても大変な数字に至った。象徵詩の名が現れたのはこの時が始まりだ。

明治四十一年に北原白秋氏は有名な詩集『邪宗門』を出した。「詩壇の先進と後進の間に一つの区画を立てた」という



この詩集の価値は全くフレッシュな浪漫的官能主義にあった。そして、その官能的要素だけでも確かに象徴派の影響があるはずだ。また彼の小曲集『思ひ出』が藤村氏の『若菜集』以後の名声を得たのも注目すべき出来事だ。

白、秋氏と同時に、初めには情緒的に優秀な詩句を持って詩壇に登場して一種幽玄な、シンボリズムを開いた人は、三木露風氏だ。近來に来て彼の『幻影の田園』は一時攻撃の標的であったが、公平な目で見る時、彼の歩んできた道は、決して無意味なことではないといえる

（『創造』 第二号 「日本近代詩抄（2）」序文 四三頁 筆者訳）

朱耀翰は、『創造』創刊号の序説で日本近代詩の流れについて詳しく述べた後、六人の詩九篇を載せたが、第二号に続いて日本近代詩の後半期の流れを説明し、四人の詩人と一六篇の詩を紹介した。蒲原有明と岩野泡鳴をその本質的表現からロマンチック・シンボリズム（浪漫的、象徴主義）と規定し、象徴詩の名前が現れたのも上田敏の翻訳詩集『海潮音』によるフランス象徴詩の紹介からだと言明している。北原白秋の『邪宗門』をフレッシュな浪漫的官能主義としてその価値を認め、続いて三木露風を一種の幽玄なシンボリズムを開いた詩人として高く評価している。三木露風は、朱耀翰の「五月雨の朝」と「狂人」が『文芸雑誌』第十号と十一号に続いて選ばれて連載された詩欄の選者であり、前述したように朱耀翰にとって藤村は、多大な影響を受けた詩人の一人であるということに注目しなければならない。

それは、日本と韓国の近代詩の成立という文学的史上の意味においても、口語自由詩の先駆者の一人として韓国近代詩を拓いた詩人と日本近代詩人との出会いによって確立された韓国近代詩への多大な影響を受けたことを意味するからである。

朱耀翰の「日本近代詩抄」は、主に浪漫主義に焦点を合わせ、日本近代詩壇の流れを海外に初めて紹介したという日本近代詩史上においても深い意義を持ち、韓国詩壇においても新しい詩文学への憧憬を抱いた若者を通して初期の韓国近代詩の発展に多くの活力を与えたということに意義を持つていえる。

その詩人と詩をまとめると次の通りである。

日本近代詩抄 (1) (創刊号)

島崎藤村 (三篇) 「おきく」「四つの袖」：(以上『若菜集』)

「小諸なる古城のほとり」：(『落梅集』)

土井晩翠 (一篇) 「丞相」(「星落秋風五丈原」の一節)：(詩集——『天地有情』)

河井醉茗 (一篇) 「蓮馨花」：(詩集——『塔影』)

横瀬夜雨 (一篇) 「お才」：(詩集——『二十八宿』)

平木白星 (一篇) 「闇のうちに」：(詩集——『日本国家』)

薄田泣菫 (二篇) 「泉」：(詩集——『ゆく春』) 「山雀」：(詩集——『暮笛集』)

日本近代詩抄 (2) (二号)

蒲原有明 (二篇) 「さいかし」：(詩集『独絃哀歌』) 「霊の日の蝕」：(『有明集』)

岩野泡鳴 (三篇) 「無言の石」「鍵を与へよ」：(以上『悲恋悲歌』)

「月と猫」：(『闇の盃盤』)

三木露風 (四篇) 「四月」「心の奥」(ⅡとⅢ)「林檎の樹かげに」：(以上『廃園』)

「春」：(『幻影の田園』)

北原白秋 (七篇) 「邪宗門秘曲」「狂へる街」「角を吹け」「空に真赤な」

「わかき日の夢」「硝子切るひと」：(以上『邪宗門』)

「芥子の葉」…（『雪と花火』）

## 五、日本近代詩抄と朱耀翰の韓国語訳との対照比較

日本の明治維新後の新しい社会や風俗を反映した詩は、それまでの漢詩・和歌などに対し、新体詩抄をはじめとして、島崎藤村は『若菜集』以下でそれまでにない浪漫主義的な叙情をうたい、近代的な詩を完成させた。『創造』に選択された詩人や詩についての具体的内容においては、朱耀翰の日本留学中に自ら体験した日本近代詩壇の詩的流れとその代表的詩人の詩を取り上げて訳し、詩人一人一人について詳しく説明を入れて紹介している。『創造』に載せた「日本近代詩抄」は最初島崎藤村の詩から始まっているが、藤村のことについては序説で述べているのでここでは省略されている。

ここで『創造』に取り上げている詩人や詩の中からそれぞれの代表的なものを一、二選んで、朱耀翰の韓国語訳と対照比較してみることにする。が、まず、外国語の翻訳の難しさや特に含蓄された詩語の表現の厳しさを考えると、全体的に朱耀翰の翻訳詩についての感嘆と共感と敬意を覚える。それに日韓辞典や参考書などの社会的環境も現在とは違う悪い条件の下で、日本語学習歴や年齢と共に在日滞在経歴などを考えでも驚きを禁じられない。

それを考えながら敢えて、『創造』の島崎藤村から始まっている「小諸なる古城のほとり」の詩を取り上げて現代語と照らし合わせながら考えてみる。

（島崎藤村の詩）

（朱耀翰の韓国語訳）

「小諸なる古城のほとり」

「고모로의넛城가에서」



濁り酒濁れる飲みて

호린술호린대로마시니

濁り酒濁れる飲みて

호린술호린대로마시니

草枕しばし慰む

집떠난몸한때를慰勞하도다

(日本詩歌 角川書店 S 53)

(『落梅集』)

(近代詩集Ⅰ・Ⅱ 日本近代文学大系 角川書店 S 48)

時代的語彙の感覚の違いはあっても、現在であればそれとは違う訳をするだろうと思うところがある。例えば、三行の「藜藿」を「鶏腸草」に訳してあるがそれより「별꽃・ビョルコツ」に訳すだろうし、終わりのところにとぶろくを表現した「濁り酒」は「호린술・フリンスル」と訳してあるが、「막걸리・マコルリ」にするのが正しいと思われる。

また、表現においては、五行の「しろがねの衾の岡辺」のところ、韓国語訳は「衾のようなしろがねの岡辺・니불가튼銀빛언덕우에」に翻訳されている。しかし、「しろがねの衾のような岡辺・은빛이불같은언덕우에」が正しいといえる。その外にも八連の「知らず」が「無く」に訳されているとか、細かいところをいえば、「藜藿」の助詞「は」が韓国語には省略されているが、あつた方が音律的でより分かりやすい表現になるといふところもある。

次の土井晩翠について朱耀翰は、「この人は軍歌的雄壯な漢文調の詩で藤村・晩翠と並稱された人であるが、その藝術的価値においては決して高いとは言えない。それでここではただ標本として彼の一節を紹介するだけである」として載せた。その次の横瀬夜雨は、「病詩人の名前で有名な人」と書き、平木白星は、「明治詩壇の先驅になるこの詩人たちの中で現在故人になられた方はこの人だけである」という詳しい説明まで入っている。

『創造』創刊号の「日本近代詩抄(1)」の序説に、藤村によって詩体を成した新体詩は薄田泣菫に至って完成したといった泣菫の詩を上げて見る。



한거변에 푸기는즐겁지아느냐.

(詩集—『가는봄』)

ああこの泉とわが情と、

共に汲ま<sup>さ</sup>んは幸<sup>さいち</sup>あらずや。

(薄田泣菫全集 第一卷 創元社 S13)

「山雀」

「山雀」

鳥なく、柿の實ひとつふたつ、

夕日<sup>ほづえ</sup>にあからむ上枝<sup>うへえ</sup>高く、

つと身をひねりつ興<sup>きよう</sup>に入りて

歌ふよ山雀<sup>やまがらす</sup>節なめらに。

새가 없다. 감열매 붉게 녀어

夕陽을 맞는 옷가지 노ponsored

머리 흔들고 꼬리 흔들고, 흥이 나서

노래하도다, 山雀이 曲調도 케,

가을 처녀여 오늘날부터 재나려가

산기슭수풀에 열매를 담으라

저녁끼하고 도라가는 길머려서

깃치귀곤하면은 가이 업스니.

秋姫今日より峯を下りて、

麓<sup>ふもと</sup>の林に實盛<sup>も</sup>れよ、

晚餐<sup>ゆふけ</sup>のかへるさ道を遠み、

翼<sup>う</sup>の倦<sup>う</sup>まんもあはれなるに。

道ゆく旅人<sup>たびひと</sup>ここをすぎて

赤丹穂<sup>あかにのほ</sup>に見る額<sup>ぬか</sup>もあげず、

길가는 나 그네여 기니 르러

불근 열매에 머리드리보지 안코

또한 등애 짐도 풀지아 느면

おもひぞわづらふ事しあらば、

들직이여압길에길을빌니지말라.

오묘한노래를못듣는귀가

野<sup>の</sup>守<sup>もり</sup>よ行<sup>ゆ</sup>手<sup>て</sup>の路<sup>か</sup>な貸<sup>か</sup>しそ、

도호<sup>도호</sup>者<sup>者</sup>의머리에이슬수이사라.

い<sup>う</sup>み<sup>う</sup>じ<sup>じ</sup>き<sup>き</sup>歌<sup>うた</sup>にも疎<sup>うと</sup>き人<sup>ひと</sup>は、

(詩集—『暮笛集』)

こころ魂<sup>だましひ</sup>のよくあらねば。

(薄田泣菫全集 第一卷 創元社 S13)

島崎藤村の詩と同じように現代語訳であれば、多分違う訳だったであろうという部分と語彙において、詩的でより美しい言葉の表現がもつといいと思う部分を上げてみると、「泉」の二行と七行に「少女」という言葉は、韓国語訳で「케집애・계집애」と訳された。現在にはあまり良くないイメージで使われており、「少女・ 소녀」のほうがより語感も優しく、綺麗な言葉であるといえる。次に言葉の間違いと意識について上げれば、八行の「柄杓・배지」の韓国語訳は「마가지」の平壤地方方言ではないかと思われるし、十二行の「榎」の韓国語訳も「朴ナモ・朴나모」ではなく「ペンナム・팽나무」であろう。意識のところで、一行の「何を・무엇을」を「誰を・누구를」に訳し、五行の「心せきて・마음조급하게」を「九十里を歩いて・九十里를거리」に、最後の行の「幸あらずや・행복하지아느냐」を「楽しからずや・즐겁지아느냐」にそれぞれ訳されている。また、美しく綺麗な表現としては、二行と七行の「うつくし」を韓国語の「카이오프타・가이업도다」と「コッタウン・꽃다운」に訳して適切で変化をもたらした表現などはいへん良いと思う。

引き続き「山雀」の作品について、一、二行併せて言えば、「ひとつふたつ」と「夕日にあからむ」の詩的表現に連想される部分がうまく翻訳されていない。「ひとつふたつ・하나둘」を「赤く実つて・붉게익어」に訳し、「あからむ・붉어지느」を「受ける・받느」に訳して平凡な表現になってしまったところがちよつと惜しい感じがする。また、「晚餐」「倦まんも」「す



ぎて」などの韓国語の表現も考えてみるべきところである。十一行と最後の十四行の表現は訳し難しく、かなり意識してしまつたと思うし、三行の韓国語訳は、とてもうまくユーモラスに翻訳されている。

『創造』第二号の「日本近代詩抄」の韓国語訳が創刊号と異なる点は、まず分かち書きをしていると言うことである。韓国語は近代に入つて単語ことに分かち書きをする文法体系をもっているが、『創造』には、発音通りに書く古い綴りと分かち書きをしている文章とが併用されていることが見てわかる。朱耀翰の自作詩は分かち書きをしているのに、「日本近代詩抄」の翻訳は分かち書きをしていないのが第二号に入ってから、厳密ではなくても分かち書きを行っている。ということは、詩が読みやすくなつたことになる。

『創造』第二号に載せた「日本近代詩抄(2)」の蒲原有明紹介には、「ここに上げた二つの例の初めは彼の浪漫的色彩を表し、次のものは彼の後年の象徴的色彩を見ることができ」と、作品「さいかし」と「霊の日の蝕」について説明し、岩野泡鳴については、「この人の奔放で悲痛な詩には一種の宗教的思想がある——彼は官能的、情緒的というよりはもつと思想的であつた」と紹介している。

ここで、三木露風の詩の韓国語訳を紹介する。朱耀翰は彼について、「近代的——という言葉が何より先に、氏の詩を見る時に思わせるものだ。繊細な情緒、敏感な感覚、古い時代から新しい時代へと線を引く詩人の最も重要な要素を彼は持っていた。」と称賛している。

#### (三木露風の詩)

(朱耀翰の韓国語訳)

「林檎の樹かげに」

「풍금나무밑에」

林檎の樹蔭に

われ、君を抱く。

日は静かに没しゆけり、  
赤く赤く海の彼方へ。

胸顫ふ接吻の中に

をりからや、轉づる小鳥。

最終の別れの時、

啼きいづる小鳥――

今もまた涙ながらに

おもひいづる彼の日のわかれよ。

(三木露風全集 第一巻 日本図書センター H14)

(『廃園』)

릉금나무 미테

나는 님을 안었다.

해는 조용히 넘어갔다

발가케 발가케 바다너머.

가슴 떨리는 임마춤

그릴때에 지지귀는 새색기

마지막 리별에

울던 새색기

지금도 눈물로

생각나는 그날의 리별이여.

기름자살면서 방에 나간다.  
우서서 처지는 너의 혼령의  
조각인가 하고 그 향이 새기――

최고향의 새기 말어나와,  
다만 우둔하니 보고있도다.  
미움처럼 생기며 구슬로써  
해었다 되었다 그 조각々々  
최고향의 새기 최후향으로  
장엄하고하니 발을 비친다.

달과고향이는 그날밤부의  
이방을 파는 듯이 되었다. (이방의 달)

三木露風 (이역・로후후)

四月

가벼운살을 잊고는 살림의 날개――  
조용한 四月날 푸르른 봄바람  
헛바람 같게 불다.  
銀미초로 연둣빛이다.

달아돌지나  
군성의 동산을 나간다.  
소리없이 사라지는 한두터 사람이있다.  
x  
회미하게 호된밤은 정답다.  
사람의 몸은 중경다.  
그대의 조종은 뜻밖도  
그 회광은 석조로듯하다.

저절으로  
비즈 불내 드려오며,  
광대한 행의 숨은 斷續하고  
두 사람의 몸을 흔하게한다.  
하수 우리니움은 여의이섯도다.  
우미사람을 취하리니, 물의 장자미안하.....

영암, 유구, 마의

릉금나무 미테  
나는 님을 안었다.

47  
해는 조용히 넘어갔다.  
발가케 발가케 바다너머.

銀빛과 흰빛, 드물의 머나손  
보라지금, 온거움에 넘쳐가며  
아름다운 無常한 온자 불노는 파  
아수 불빛의 노래  
불어오는 바람  
생각에서 났다, 다시 온드러보라.  
뛰어지나는 전은이의한 말부들.

나의 사랑하는이  
조곤조곤 離한 遠로 주유어  
시내가 어서든 버들들이여  
아수 四月날, 그날의대낮  
그한세말도 올진도다.

마음속 (이와피)

x  
달은 충후기에 고향의  
華麗하고 장후론 자리에 잠잔다.  
오늘날, 상우에는 사랑의 너울을저어  
수업은 스스로 쳐리고  
수순々 사라지는 한두터 사람이있다.

가슴 떨리는 임마춤  
그릴때에 지지귀는 새색기  
마지막 리별에  
울던 새색기

지금도 눈물로  
생각나는 그날의 리별이여. (이방의 달)

두손연진가, 등리마, 마의  
종횡은 가루의, 破의하남  
종조린 破의하남  
변죽이는 無常의 노래.  
크다란 破의하남  
그것, 불을 태우며  
순수히 기우린 내귀의는  
기름의 비를 불린다.  
두로움은 離한 遠로 주유어  
원혼으로 조종한다



無花果の乳をすすり、ほのぼのと

無花果의 젖을 빨고 가만가만히

歌はまし、汝が頸の角を吹け。

노래하자, 너의목에 뿔을불라,

わが佳耦よ、鐘きこゆ、野に下りて

종소리난다, 동무여 들에나가

葡萄樹の汁滴る邑を過ぎ、

포도나무汁흐르는 마을을지나

いざさらば、パアテルの黒き袈裟

아々벌서 神父들의 검은袈裟

はや朝の看經はて、しづしづと

아침禮拜 마치고 일닌일닌

見えがくれ棕櫚の葉に消えゆるまで、

棕櫚속에 천々히 사라지도록

無花果の乳をすすり、ほのぼのと

無花果의 젖을빨고 가만가만히

歌はまし、いざともに角を吹け、

노래하자, 서로함께 뿔을불라

わが佳耦よ、起き来れ、野にいでて

나의동무여, 니러나라, 들에나가

歌はまし、水牛の角を吹け。

노래하자, 물소의 뿔을불라.

(『日本近代文学大系』角川書店 S56)

(『邪宗門』)

北原白秋の「角を吹け」の韓国語訳もよくできていて読みやすいが、いくつかを取り上げると、詩語における表現である。

九行の「ほのぼの」と、十四行の「しづしづ」の韓国語訳で表現の難しさを感じさせる。「ほのぼの」の韓国語訳は「静かに・가만가만히」よりは、温もりを感じさせる「暖かい・훈훈하게」の方がいいし、「しづしづ」の訳は「はやく・일닌일닌」よりは、「静かに・조용조용히」の訳が作者の気持ちに近いのではないかと思う。全体的に句や節の順序を入れ替えながら翻訳に変化をもたらせようと努めた朱耀翰の気持ちが見え取れる。

日本近代詩抄の韓国語訳を見て感じるのは、一九一〇年代の「朝鮮語」と現在の「韓国語」の違いや変遷を分けることに

無花果의 젖을 빨고 가만가만히  
종소리난다, 동무여 들에나가  
포도나무汁흐르는 마을을지나  
아々벌서 神父들의 검은袈裟  
아침禮拜 마치고 일닌일닌  
無花果속에 천々히 사라지도록  
無花果의 젖을빨고 가만가만히  
노래하자, 서로함께 뿔을불라  
나의동무여, 니러나라, 들에나가  
노래하자, 물소의 뿔을불라.

# 미천거리

미천거리의 무덤은 그대에게 알리지 않겠다. 너의  
정신은 형제와 함께 있을 때로 돌아온다.  
무덤은 그대에게 알리지 않겠다. 너의  
정신은 형제와 함께 있을 때로 돌아온다.

무덤은 그대에게 알리지 않겠다. 너의  
정신은 형제와 함께 있을 때로 돌아온다.  
무덤은 그대에게 알리지 않겠다. 너의  
정신은 형제와 함께 있을 때로 돌아온다.

무덤은 그대에게 알리지 않겠다. 너의  
정신은 형제와 함께 있을 때로 돌아온다.  
무덤은 그대에게 알리지 않겠다. 너의  
정신은 형제와 함께 있을 때로 돌아온다.

무덤은 그대에게 알리지 않겠다. 너의  
정신은 형제와 함께 있을 때로 돌아온다.  
무덤은 그대에게 알리지 않겠다. 너의  
정신은 형제와 함께 있을 때로 돌아온다.

무덤은 그대에게 알리지 않겠다. 너의  
정신은 형제와 함께 있을 때로 돌아온다.  
무덤은 그대에게 알리지 않겠다. 너의  
정신은 형제와 함께 있을 때로 돌아온다.

なるし、訳者朱耀翰の出身地の方言や語彙がまれではあるが見られるところに大変個性的な表現を感じる。

## おわりに

以上、日本における日韓文学関連研究を一九一〇年代の朱耀翰を中心に述べてきた。

時代的に日韓併合の真最中にあった一九一〇年代に、十二歳の幼い朱耀翰が父に連れられて来日し、異国の言葉を覚え、明治学院で学んだ後、第一高等学校に進むまでの六年間の日本滞在生活は、朱耀翰にとって詩作活動と共に実に有意義な時代であったといえる。

国を奪われた環境の下での日本留学生生活となった朱耀翰は、三年間の任期を終えて帰国した父との二人暮らしも終わって一人寮に入り、恋しい母と故郷を思う気持ちと他国での寄宿舎生活から来る緊張感は強かったであろうと思われる。

しかし、幼い頃からの天才的文才と基督教の親から受けた家庭教育は、朱耀翰の純粋な心持と人間性豊かな詩作活動へと輝かせてくれた。明治学院での『白金学報』や『文藝雑誌』を通しての三木露風との出会いと川路柳虹に出会ってからの『伴奏』、『日本現代詩選』、『現代詩歌』などの文芸活動による日韓両国の詩文壇における意味は大きいものであった。

日本詩壇を通して世界文学を理解し、韓国の純文芸誌『創造』を設立して「日本近代詩抄」の韓国語訳を連載し、日本の詩文壇の流れを汲んで韓国に紹介することによって韓国詩壇発展に貢献した一人の詩人朱耀翰は、天才的感性や叙情性豊かな情熱によって作り上げた作品世界を通して永遠不滅の詩と共に多くの人から愛されるであろう。

注

- (1) 『私の履歴書』 『朱耀翰文集』 曙Ⅰ 第一部「私が体験した二〇世紀」一二頁 ソウル、耀翰記念事業会発行（一九八二年二月十日）
  - (2) 『東京教会七二年史』 第二章「東京教会 設立時代」 九三頁―一二〇頁 在日大韓基督教 東京教会発行（一九八〇年十二月）
  - (3) 『朱耀翰文集』 曙Ⅰ 第一部「私が体験した二〇世紀」 第一章「東京と上海」一八頁 ソウル、耀翰記念事業会発行（一九八二年二月十日）
  - (4) 『朱耀翰文集』 曙Ⅰ 第一部「私が体験した二〇世紀」 第一章「私の履歴書」一五頁 ソウル、耀翰記念事業会発行（一九八二年二月十日）
  - (5) 『朱耀翰文集』 曙Ⅰ 第一部「私が体験した二〇世紀」 第一章「東京と上海」二〇頁 ソウル、耀翰記念事業会発行（一九八二年二月十日）
  - (6) 『時調』
- 韓国固有の文学ジャンルである「時調」は、高麗中期から歌い始めて高麗末期に成立したといわれている。韓国文学で定型短詩形文学といえは「時調」があるのみで、はじめは「短歌」といつていたが十八世紀から「時調」とよばれるようになった。形式面では、三章六句四十五字前後の定型的抒情詩で、初章三四三四（または、二四四四）、中章三四三四（または、三三四四）、終章三五四三となっていて、ことばの音数律によつて一二字の変化はあつても基本的には変わらない。特徴として終章の初句の音数「三文字」は不変であるということである。現代文学においても「時調」文学のジャンルは特徴を持ち続けながら発展している。

- (7) 『朱耀翰文集』 曙Ⅰ 第一部 第一章「東京と上海」二二頁―二四頁より
- (8) 『朱耀翰文集』 第一部 第一章「東京と上海」二〇頁―二二頁より
- (9) 『東京教会七二年史』 第四章「二・八学生独立運動」一三四頁 在日大韓基督教 東京教会発行（一九八〇年十二月）
- (10) 『朱耀翰文集』 曙Ⅱ 「年譜」九四九頁 ソウル、耀翰記念事業会発行（一九八二年二月十日）

参考文献

一、朱耀翰と日本近代詩抄

1. 『白金学報』 第三十一号―第四十四号 明治学院中学部学友会発行（一九一三年―一九一八年）
2. 『文芸雑誌』 第一巻第四号・第一巻第五号 日本文藝協会（一九一六年十月・一九一六年十一月）
3. 『伴奏』 第二輯―第四輯 曙光詩社（一九一七年一月―一九一七年七月）
4. 『日本現代詩選』 『伴奏』第五輯 曙光詩社（一九一七年十一月）
5. 『現代詩歌』 第一巻第一号―第二巻第二号 曙光詩社（一九一八年二月―一九一九年二月）
6. 『創造』 創刊号・第二号 創造社（一九一九年二月一日・一九一九年三月二〇日）

二、日韓詩集参考文献

1. 『三木露風全集』 第一巻―第三巻 三木露風 日本図書センター（一九七二年―一九七四年）
2. 『日本国家』 平木白星 内外出版協会（一九三八年二月二十日）
3. 『薄田泣菫全集』 第一巻 薄田泣菫 創元社（一九三八年十二月三十一日）
4. 『邪宗門』 北原白秋 ほるぶ出版（一九八四年八月一日）
5. 『近代詩集』Ⅰ・Ⅱ 日本近代文学大系 角川書店（一九七三年十月二〇日）
6. 『日本の詩歌』 近代詩集 中央公論社（一九七九年十一月二〇日）

7. 『日本詩集』 角川書店 角川書店 (一九七八年六月十日)
8. 『日本の詩集』 角川書店 (一九七七年二月二十日)
9. 『日本詩人全集』 新潮社 (一九八〇年)
10. 『日本定本詩集』 詩集『塔影』『花鎖抄』 河井醉茗 西郊書房 (一九五六年)
11. 『蒲原有明全詩集』 河出書房刊 (一九五六年)
12. 『悲戀悲歌』 岩野泡鳴作 (一九〇五年六月二二日)
13. 『三木露風詩集』 三木露風 第一書房 (一九二六年)
14. 『邪宗門』 北原白秋 西郊書房 (一九四八年十二月)
15. 『火花と雪』 北原白秋 齊藤書店 (一九四九年)
16. 『現代日本文学全集』 現代日本詩集 改造社 (一九二九年四月一五日)
17. 『韓国詩人全集』 朱耀翰 外三名 ソウル・新丘文化社 (一九五九年二月一五日)
18. 『朱耀翰詩選集』 「火祭り」 ソウル・泉社 (二〇〇〇年十一月十日)
19. 『朱耀翰文集』 曙Ⅰ・Ⅱ ソウル・耀翰記念事業会 (一九八二年二月一五日)

### 三、関連研究参考文献

1. 『三木露風研究』 森田実歳 明治書院 (一九九九年二月二十日)
2. 『北原白秋研究』 杉本邦子 明治書院 (一九九四年二月二十日)
3. 『近代詩の形態と成立』 関良一 冬至書房 (一九七六年六月十五日)
4. 『日本近代名詩選』 関良一 外五名 右文書院 (一九九〇年五月十日)
5. 『近代文学評論体系』 第八卷 詩論・歌論・俳論 安田保雄・本林勝夫・松井利彦編 角川書店 (一九七三年七月十日)
6. 『近代詩十章』 菅谷規矩雄 大和書房 (一九八二年十月二十日)
7. 『鑑賞現代詩』 I 明治 吉田精一 筑摩書房 (一九六六年十月二十日)
8. 『鑑賞現代詩』 II 大正 伊藤信吉 筑摩書房 (一九六六年十月二十日)
9. 『日本の名詩』 小海永二 大和書房 (一九六五年四月二十日)
10. 『近代文学鑑賞講座』 三好達治・伊藤信吉 編 角川書店 (一九六二年四月五日)
11. 『日本文学史』 新聞進一・井上宗雄・前田愛 編 旺文社 (一九七四年十二月十五日)
12. 『日本における朝鮮人の文学の歴史』 任展慧 法政大学出版局 (一九九四年一月十五日)
13. 『韓国現代詩小論集』 佐川亜紀 興英文化社 (二〇〇〇年十二月二五日)
14. 『近代朝鮮文学における日本との関連様相』 大村益夫 外五名 緑蔭書房 (一九九八年一月三十日)
15. 『朝鮮文学史』 金 東旭 日本放送出版協会 (一九七四年十二月二〇日)
16. 『朝鮮文学史』 金 思煒・趙 演鉉 著 北望社 (一九七一年十二月二〇日)
17. 『韓国・歴史と詩の旅』 金 思煒 明石書店 (二〇〇〇年十二月二十日)
18. 『朝鮮の詩』 尹 学準 講談社学術文庫 (一九九二年四月十日)
19. 『韓国時調大事典』 上・下 朴 乙洙 編著 ソウル・亜細亜文化社 (一九九二年一月五日)

20. 『韓日近代文学の比較研究』 慎 根絳 著 ソウル・一潮閣（一九九五年二月一五日）
21. 『朝鮮三・一独立運動』 朴慶植 平凡社 （一九七六年十一月二六日）
22. 『東京教会七二年史』 在日大韓基督教東京教会 吳允台牧師 編著 恵宣文化社（一九八〇年十二月七日）

四、その他論文

1. 「朱耀翰と川路柳虹」 申 銀珠 「淵叢」近代文学論集 第二号
2. 「韓国近代文学の中の日本文学」 申 銀珠 「人間文化研究年報」第十六号（一九九二年）
3. 「平和主義から親日派へ」——李光洙・朱耀翰に見る日本統治下の韓国知識人の一断面—— 木村 幹 『愛媛法学会雑誌』第二二卷第二号 愛媛大学法学会（一九九五年）
4. 「日本で発掘された草創期韓国人たちの留学時代資料」 白川 豊 ソウル・『月刊文学』一四七号（一九八一年五月）
5. 「朱耀翰と日本近代詩」 梁 東国 東京大学院学位論文

（付記） 本稿は、平成十三・十四年度二松学舎大学東洋学研究所研究補助費（研究課題「日韓課題「日韓文学関連研究——一九一〇年代の川路柳虹と朱耀翰」の交付を受けた研究成果に基づくものである。